

サービラーニングによるフィールドワーク型授業の実践

～障がい者就労継続支援 B 型施設における健康運動指導の試み～

教育学部保健体育 牛山眞貴子

1. 授業の概要

現代の地域課題を解決するために、地域と大学教育が協働し、地域の活性化とコミュニティの再生に寄与できる人材が求められている。課題解決できる人材を養成するためには、人との関わりの中で経験的に学び生活に根付いた思考と技能を培う時間が必要である。

本授業は、体育・スポーツを専攻する学生が他者、特に子ども、高齢者、障がい者等支援を必要とする人たちと関わることから協働を考え、これからの教養として持つべき知識理解ならびに社会を構成する人として、私たちにできることを構想している。学外に出て、知識と実践の往還を計りながら、「コミュニケーション能力の涵養」を目指してサービラーニングとして取り組んだ。

この取り組みは、3年生前期「からだと表現行動」受講者7名、ぱれっと道後職員藤川氏とチームを組み、週1回本授業時間を活用して約1時間の運動指導を行った。

○ディプロマ・ポリシー（卒業次の到達目標）
D-1現代社会で生じている健康やスポーツに関するさまざまな課題について論じ、適切な対応を考えることができる。（思考・判断）

D-2多世代にわたる対人関係能力およびコミュニケーション能力を獲得し、豊かな地域社会づくりに貢献するための適切な行動ができる。（態度）

○到達目標

- 1) 知識・思考：バリアフリー・ノーマライゼーションの概念を説明し、論述することができる
- 2) 技能・表現：障がいのある人、高齢者、生活支援を必要とする人たちと、運動を通して交流することができる

- 3) 意欲・関心：積極的に行動することができる。分け隔てなく人と関わることに能動的に取り組むことができる。

ディプロマ・ポリシーと到達目標は、D-1と知識・思考が対応し、D-2と技能・表現、意欲・関心が対応しており、リンクしている。

○授業内容

<授業構成>

就労継続支援B型事業所ほほえみ工房パレット道後の利用者さん8から10名対象に週1回1時間（昼休みの時間）、近隣の愛媛県身体障害者センター体育館、会議室、道後周辺を活用して、ノルディックウォーキング、ラダー・ランニング、フライングディスク、バランスボール、ダンス、キックボクササイズを使って、運動メニューを作成し、前期10回の運動指導を実施した。

受講生のアクティブラーニングを促進するために、ゲストスピーカーの講話をもとに、事前指導ではグループワークで運動指導案作成と運動教室のシュミレーションを重点的に行った。

受講生を3チームに分け、10回を3／3／4に分け、最もエフォートの多いチームを「学生リーダー」として、その回のマネジメントとメインの指導を担当することとした。

第1回 ガイダンス

授業の目的、日程、評価の確認）、授業マナーとルール、ノーマライゼーション・バリアフリーについての講義

第2回 就労継続支援B型事業所ほほえみ工房パレット道後について

ゲストスピーカー：ぱれっと道後職員藤川氏、前年度運動指導担当学生 栗田君

第3回 実施計画作成とシュミレーション

- 第4回 実践 リーダー学生Aチーム
 第5回 実践 リーダー学生Aチーム
 第6回 実践 リーダー学生Aチーム
 第7回 実践 リーダー学生Bチーム
 第8回 実践 リーダー学生Bチーム
 第9回 実践 リーダー学生Bチーム
 第10回 実践 リーダー学生Cチーム
 第11回 実践 リーダー学生Cチーム
 第12回 実践 リーダー学生Cチーム
 第13回 実践 リーダー学生Cチーム
 第14回 実践 についての振り返り
 グループワークによるまとめと検討（プレゼンテーション）、評価。
 第15回 健康運動教室に参加してくれた利用者さんの職場を訪問し、交流。

2. アンケート結果

記述による振り返りと授業に関する意見の徴収を図ることを目的に、担当学生の活動について質問紙による自己評価、授業改善の調査を行った。*授業に関する結果のみ抜粋

1) 利用者さんとの運動指導をおこなう機会を持つことについて

全員が肯定的に捉えていた。受講生の感想の中に、「リーダー担当の時には運動の説明や声かけで精一杯で分からなかったが、サポートに回った期間、利用者さんの反応、感情が表情や身振りから察することができて、しだいに支援することが自然にできるようになった」「できないことをできるようになればと思う気持ちと、できなくても楽しめる方法はないかと探す気持ちがあり、できなくても楽しめる自分の気持ちを選んだ」「言葉でのコミュニケーションが難しくても、言葉じゃないと思いはじめて、一緒に動くことが大切だと思った」「励ますことが、これほど重要とは思わなかった」などの報告があった。

2) 活動での苦勞したこと

7人がそれぞれ異なる記述であったため個別に挙げる。

- ①「上達したい」と利用者さんが思うにはどうしたら良いか？
- ②説明が通じていない。
- ③運動量が少ないので、運動量を上げるには？
- ④音楽に反応する人としらない人がいる時音楽

を止めた方が良いのか？

- ⑤一緒に運動しないと止めてしまうので、一緒に動いているがそれで良いのか？
- ⑥体力差が大きいので、ウォーキングはコース別にした方が良いか？
- ⑦障がいによって反応が違うので、担当者は同じ人を担当する方が良いのでは？

3) 利用者さんと継続して関わること

全員が肯定的に捉え、フィードバックとして本取り組みを継続していくことを推奨していた。

3. 改善点

体力別のグループ編成、担当者の固定化等、授業を通して、利用者さんの健康運動指導が効果的になるような改善が期待されている。

4. 総括

本授業が取り組んだ健康運動指導は、サービスマスラーニングを用いることによって受講生が能動的に授業に取り組み、さらに高い意欲と関心で実践力につながっていくことを目的としている。グループ活動を学外等のアウトリーチ型で行う場合、事前の打ち合わせ等のマネジメントの丁寧さと関係性の構築が肝要である。ステークホルダーであるばれっと道後の全面的な支援が合って、本授業は成立している。また、実施面では現場に入ったら指導内容やタイムスケジュールを大幅修正する時間はほとんどない。今回、事前指導でリーダーとサポートの回の中で分業化に関して、各回の各自のエフォートをクリアにしたため、受講生は自己の役割に応じた毎回の目標が立てやすくなり、分業と協働が円滑になった点が受講生の振り返りからも十分伺われたため今後も活用していきたい。本授業は、支援型リーダーの育成を目的とする授業の一貫として、キャリア開発コースの教育課程の中で位置づけており、後期の必修科目「運動とバリアフリー」での継続によって、さらに実践力の育成につながっていくことが期待される。